
IS 日輪の乙女達

睦城矢刺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 日輪の乙女達

【Nコード】

N5157X

【作者名】

睦城矢刺

【あらすじ】

昭和二十年八月、国を守る為に、たった三人で米軍と戦った軍人達と、その中で散って逝った、一人の教育者と、三十五人の、『日輪の乙女達』。

『七生報国』のように、祖国に生まれ変わった彼等は、『最強の兵器』と称される『インフィニット・ストラトス』によって再び、戦いの渦に巻き込まれていく——
話題の小説『インフィニット・ストラトス』と、歴史ミステリー『日輪の遺産』とのコラボ作品です。

それではどうぞー！

序（前書き）

ちよつと書きなおしての再投稿です。

具体的にはほとんど変わりません。修正が少なくなるだけで。

この小説自体は基本変わらずに続けていくので、皆さんどうかよろしく願います。

それではどうぞ！

序

序

化物のような夕日が、淡緑の山並みの中に沈もうとしている、風の凪いだ河原。

茶緑色の軍服を纏った軍人らしき男が、中腰の姿勢で、軍刀と思しき刀を右に薙ぎ払った状態にいる。

肩を静かに上下させる男の足元には、カーキ色のマントを羽織った、これまた軍人らしき男と、男の切り落とされた首と右腕が転がっている。

軍刀を持った男は、血で塗れた軍刀を静かに下ろしながら、略帽を目深に被り表情が上手くうかがえない端整な顔を半分だけ、後ろに向かせる。

彼が今手に持っている、抜き身の刀の様に目をギラつかせながら、食いしばった歯の隙間から、絞り出すように言葉を出す。

「…………たえそれでも、…………あの娘には生きてもらわなければならんのだっ…………！」

その言葉はとても悲しく、悔しそうな響きだった

一夏 Side

嫌な夢を見た後に目を覚ますと、身体中の関節が、動くのを拒否

するかのようにギシギシときしむ。

日本人特有の黒髪に、少し寝癖を付けた少年、織斑一夏は、自室のベッドの上で何とか上体を起こす。締め切ったカーテンの隙間からは鳥達のさえずりと共に、白々とした朝日が差し込んでくるのだが、暗い部屋の中で、やけにはつきりと見える。

「……………またあの夢か」

一夏はここ最近、同じ夢ばかりを見るようになった。

夕焼けの河原の上、人を斬り殺した、どこか見覚えのある顔の軍人が、苦渋に満ちた表情で、誰かに、何かを訴えかけている。そんな夢を。

一体あの夢は何なのか。一夏は今までに何度もそれを考えた。しかし何度考えても、正解にたどり着くことはない。

唯一の肉親である姉に相談してみた事もあったが、その結果は、苦笑しながら、ただ疲れているだけなんじゃないのか。と言い切られるばかりだった。

気にしていても仕方がないか

一夏はいつもの通り、あれをただの夢だと思い込むようにして、昨日干したばかりの布団を身体の上かのけてベッドから降り、今日から通い始める高校の制服に着替えて朝食を作る為に、クローゼットの中にしまっておいた制服を取り出す。

IS学園の、男子用制服を

? Side

プルルルルルッ プルルルルルッ プルルル……

ピッ

「おう、司朗か？ 俺だ」

『はい、何か？』

「司朗は今日からIS学園だったな」

『ええ、あのバカのおかげで』

「まあそう言うな、お前はどの道、学園に行かせるつもりだったかな」

『手間が省けたという事ですか』

「クク、そういう事になるな。……ああ、それと」

『はい？』

「……………二人を頼む」

『……………わかっていますよ。マドカによろしくお願いします』

「「私も学園に行く！」ってゴネてたもんな。分った、伝えとく。
……………頼んだぞ、真柴少佐」

『了解いたしました、織斑博士』

ガチャ

—— 役者は集い、舞台の幕が上がる。

IS 日輪の乙女達

序（後書き）

感想をお待ちしています！

第一話（前書き）

少し修正しました

第一話

一夏 Side

「全員揃ってますねー、それじゃあSHRはじめますよー」

黒板の前に立ってにつこりとほほ笑んでいる女性副担任の山田真ヤマダ マ耶先生。

サイズが合っていない黒縁眼鏡を掛けた童顔に、生徒のそれと変わらないくらいに低い身長、これまたサイズが合っていないのか、ダボダボの大人用の服を着ている。

そこから受ける副担任の印象は、『子供が無理して大人の服を着て来ている』と言ったところか。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……………」

山田先生はほほ笑みながら言うが、教室の中は妙な緊張感に包まれていて誰も反応しない。もとい、できない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお長いします。えっと、出席番号順で」

涙目でオロオロしている山田先生がかわいそうなので、せめて俺くらいは反応を示しておこうと思うのだが、生憎と、今の俺、織斑一夏にはそんな余裕はない。

なぜか？ と言われると、率直に言っと。

このクラス、俺達二人以外全員が女子だからだ！

これは想像以上にキツイ……………！

真ん中の最前列、それが俺の席なのだが、今俺の背中には全女子の視線が突き刺さっている。

助けを求める為に、俺はチラリと窓側の方に目をやる。

そこにいるのは、小四の頃に彼女が転校して以来、六年ぶりに再開した幼馴染、その名は篠ノ之箒。

昔通っていた剣道場の娘さんで、昔と変わらない、肩下まである黒髪のポニーテールをしている。また、席に座っている姿勢は、剣道をたしなんでいる者のそれで、凛とした雰囲気を出している。

箒は俺の視線に気付くとフイツと顔をそらした。

六年ぶりに再会した幼馴染にその反応はどうよ？ ひよつとしたら嫌われているのか？ 俺

幼馴染の反応に、目に見えてへこむ俺。だがまだ望みが断たれたわけではないと、今度は箒の後ろの席に目をやる。

そこには、このクラスにいるもう一人の男子、中学からの親友であり、剣の師でもある真柴マシバ司朗シロウがいる。

中学時代、同じ剣道部で稽古にいそしんだ親友。

箒が転校して以来、張り合う相手が居なくなつてやめてしまった剣道を再び始めたきつかけとなった司朗は、うちの姉以上の剣の腕を持っていて、『一緒に稽古をする』というよりは、『技を教わった』関係だ。

現に昔、俺から司朗の事を聞いた姉が司朗と手合わせをした事が一度だけあるのだが、結果は、姉の敗北で終わった。

それも、しのぎの削り合いの末の結果ではなく。文字通り、瞬殺されたのだ！

姉が勝つと思い込んでいた俺は、その結果に啞然とした。

瞬きすらできないほどの速さで司朗は、姉が竹刀を振り上げようとした一瞬のすきを書いて竹刀を弾き飛ばし、その切っ先を姉の喉元に突きつけていた。

俺の姉は、そこらへんの剣士には決して負ける事がないほどの腕前を持っている。その姉に反撃の暇も与えず初段で倒してしまった司朗は、それほどまでに凄かった。

そして今、筭と同じ、ビシッとした姿勢で席に座る司朗からは学生とは違う、『大人の男』といった感じの雰囲気がある。

窓の外に視線をやっていた司朗は俺の視線に気付いたのか、ゆっくりと、同性の俺から見ても端整だと思っ顔をこちらに向けて俺と目線を合わせる。

俺は目線にありつただけのヘルプサインを注ぎ込む。なにせうちの姉を反撃の暇もなく倒した男だ。これくらいの事には気付くだろう。やがて司朗は全てを悟ったかのように小さく頷いた。

分ってくれた！　今ので分ってくれたんだ！

ぶっちゃけて言うと今ので分ってくれるとは思ってもみなかった俺は喜びの笑みを浮かべる。

司朗はそれに応えるように、口に笑みを浮かべて、机の中から出したノートに何かを書き始め、書き終わったそれをこちらに向ける。何かアドバースが書かれていると思った俺はノートに書かれた、端整な文字を読む。

『骨は拾ってやる』

俺が失敗する前提じゃねーかつ！

親友からの慈悲もない言葉に俺は肩を落とす。

見ると司朗はノートに加えて親指をサムズアップしているのだが、口元がひくついているのを見ると、どうやらこの状況を楽しんでいるようにしか見えない。

サディスト！ このサディストツ！

今度は精いっぱいの憎しみを目線で送るが、司朗はどこか吹く風で全く気にしていない。

また、司朗の前にいるもう一人の男子であり親友の野口孝吉は、ノグチ コウキチ顔の前で申し訳なさそうに手を合わせている。

中学時代からの仲間の内で孝吉は一番の良識家で温厚家、眼鏡をかけたその誠実そうな顔からは、『いかにも学校の先生』といった雰囲気がある。今教壇の上でオロオロしている山田先生と代わつても不自然さがない位に。

そんな孝吉は、どんな状況でも仲間を見捨てることはまずない。

そんな孝吉が助けてくれないとなると、今の俺の状況は救いようがないという事になる訳で。

俺は筈に無視されたとき以上にヘコむ。

実は他に男子が一人、中学からの親友がいるのだが、そいつはこの一組とは違う二組にいるので助けてもらうことはできない。もしいたとしても、あいつも司朗と同じ行動をとるだろう。

まさしく四面楚歌。

「——くん、織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!?!」

大声で名前を呼ばれたので、思わず声が裏返ってしまった。案の

定周りからクスクスと笑い声が上がり、たまらなく恥ずかしくなる。
ちなみに司朗と孝吉は必死に笑いをこらえていた。

あいつらぁ！

キレかかっている表情が自分に対して向けられていると思ったの
だろうか、山田先生はヒウ、と小動物の様におびえ涙目になりなが
らペコペコと頭を下げる。

「お、大声出しちゃってゴメンね、お、怒ってたらごめんね、で、
でもね、あのね、自己紹介始まって今『お』の織斑くんなんだよね、
だ、だからね、ゴメンね、自己紹介してくれるかな？ ダ、ダメか
な？」

なんだか弱い者イジメみたいになってきたな。というかこの人には
大人の威厳というものはないのか？
ないだろうな。うん。

「あの、ちゃんと自己紹介しますから、もう謝らないでください。
さっきのは山田先生に対してではないので」

窓側にいる外道二人に対するものです。

「ほ、本当ですか？ 本当ですよ？ や、約束ですよ。絶対です
よ！」

「は、はい、分かりました、分かりましたから」

詰め寄ってくる山田先生を何とか静めさせて、席を立ち、後ろを向
く。

うつ……

後ろを向いた瞬間に一機に視線が押し寄せる。これはもうトラウマものじゃないか？　と思えるほどに。

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

教科書のお手本のように頭を下げ、上げて、

女子たちからのキラキラした視線に俺はたじろぐ。

——この『もつと色々喋ってよ』的な視線は何でスカ？　こっちはあまり喋る事なんてないぞ！

俺の無言の訴えは彼女達は届かないようで、視線がやむことはない。

マズイ、このままでは『暗い奴』のレッテルを貼られてしまう。

それだけは絶対に避けねばならない。そこで俺は、この状況を脱するためにより有効な言葉を口にする。

「……………以上ですっ」

ガタタツ、とずっこける女子が数名いた。ここは吉本か何かか！？

パンツッ！

いきなり頭を叩かれた。

「いつ……!？」

今の痛みに覚えがあった俺は恐る恐る後ろを振り向く。
案の定、そこにいる人物は俺がよく知る人物だった。

「げっ！ 関羽!？」

パンツ！

また叩かれた。ちなみにコレもの凄く痛い。例えるなら、コレ一回でスイカが粉々になってしまうくらい。

「誰が三国志の英雄か、バカ者が」

トーン低めの声、黒のスーツにタイスカート、スラリとした長身に、鍛えられているが決して肉厚ではないボディライン。組んだ腕に、狼を思わせる鋭い吊り目。

俺の姉、織斑千冬がいた。

第一話（後書き）

感想をお待ちしています！

第二話（前書き）

第二話です！

色々と詰め込みすぎました。すいません。

第二話

「ち、千冬姉——？」

俺こと織斑一夏は突然の身内の登場に驚いた。

職業不明で、月一、二回しか家に帰ってこない。独身歴〃年齢の我が姉が、何故IS学園に！？

パンツ！

「お前今何か失礼な事を考えなかったか？」

「いえ、考えておりませんです、ハイ」

どうやら千冬姉は、弟の俺が知らぬ間に人間をやめてしまっているようだった。人の心を読んだ拳句に出席簿で頭を、それも尋常じゃないほどの力で叩いてきた。

というか、教師やってたのかよ。言ってくれてもよかったのに。

「山田君、クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

「い、いえっ、副担任ですから。これくらいは……………」

優しい声で山田先生に話しかける千冬姉。

何？ その優しそうな声は。俺だって聞いたことなんてないぞ。

「さて諸君、私が織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物の操縦者に育てることが仕事だ。私の言う事は良く聴き、理解しろ。出来なければ、出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳ま

でに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言う事は聞け、嫌でも聞け。いいな」

ワオ、なんという暴君的発言。軍隊の鬼軍曹でもマシな事を言うぞ。というより「逆らってもいいが言う事は聞け」って、言っている事が矛盾してるって気付いていないのかな。千冬姉は。

「「「「「キャ————ッ！」「」「」「」

突然教室に響く黄色い声援。なっ、なんだ！？

「千冬様！ 本物の千冬様よ！」

うん、確かに本物だね。うん。

「私、ずっとファンでした！」

千冬姉、良かったね。熱狂的なファンがいてくれて。

「私はお姉様に憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！」

いや別に、南北北海道だろうがどこから来ようがどうでもいいんだけど。

「お姉様にご指導いただけるなんて感激です！」

それはよかったね。でも軍隊の新兵教育以上にスパルタだと思うよ。

「私、お姉様の為なら死ねます！」

おいつ、早まるなっ！

そんな風に騒ぐ女子達を、千冬姉は鬱陶しそうな顔で見る。

「……………毎年、よくもこれだけの馬鹿が集まるものだ。逆に感心させられる。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿を集中させているのか？」

俺は後者だと思うよ。それと千冬姉、人気って買えないんだぜ？
もうちょっとファンは大事にしようよ。

「キャ——ッ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけ上がらないように（カラダにも）躑して〜！」

……………とりあえず最後のは忘れよう。うん、そうしよう。

「で、満足に挨拶もできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は——っ」

パンツッ！

「織斑先生と呼べ」

「……………ハイ、織斑先生」

このやり取りがまずかった。つまり、姉弟なのがクラス中にバレてしまったのだ。

「えっ？ 織斑くんって、あの千冬様の弟？」

「じゃあ、『世界でISが使える数少ない男子』の一人であることも、それが関係して？」

「ああつ、いいなあつ、代わってほしいなあつ」

やめておけ。一週間ともたないぞ。

まあ、それはそれとして、一言言っておこう。

俺達は今、『世界でISが使える数少ない男子』として、公立IS学園にいる。

ちなみに、IS学園と言うのは、

《ISの操縦者育成を目的とした教育機関であり、――

《長つたらしいので原作を読んでくだ

さい》

――、また日本国での生活を保障する事。（IS運用協定

『IS操縦者育成機関について』の項より抜粋）

という学園なのだ。

分りやすく言えば、

『日本人が作ったISのせいで世界は混乱してるから責任もって人材管理と育成の為の学園作れ。そしてその技術よこせ。あ？ 運

営資金？ 自前に決まってるんだろ。バーカ』
という事。

なんだか、日本の押しの弱さに涙が出てきそうになる。

で、なんで俺たちみたいな男が、こんなところにいるのかと言うと、

………簡単にいえば、試験会場で迷子になってしまったのが始まりだった。

俺達四人は皆、就職率が高いうえに学費が安い、藍越学園と言う私立の学校に受験しようとしていたのだ。

俺としては、小さいころに両親が居なくなってから、親の様に面倒を見てくれた千冬姉に対して、早くに職について安心させてあげたいというのが本音だったもんだから、その点において藍越学園は最高ともいえる。

ちなみに、他の三人がこの学校を選んだのは『家から近いから』というものらしい。

俺からしても、藍越学園は家から近いし助かるのだが、それのみに主眼を置いているというのは如何なものか。

そんなわけで受験当日。試験会場となっている文化会館に来たのだが、恥ずかしい事に迷ってしまい、偶然見つけた部屋でISを発見。ために触って見たら女にしか使えないISが、男である俺に反応してしまったのだ！

あまりの衝撃に動けなくなっていると、異変に気付いた職員さん達に見つかってしまい、今に至るという訳だ。

ちなみに司朗達については、『ひょっとしたら機動出来るんじゃないのか？』という、職員さん達の疑問の下ISに触らせてみたら、なんと三人全員に反応を見せてしまい、必然的にIS学園に放り込

まれることになったのだ。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君にはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後は実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ。私の言葉には必ず返事をしろ」

ワオ、なんといい暴君的発言。軍隊の（以下略）

パンツ！

「席に着け、馬鹿者」

はいはい、俺は馬鹿ですよ。

こうして俺達の、波瀾万丈すぎる学園生活が幕を開けた。

第二話（後書き）

感想、お待ちしております！

第三話（前書き）

三話です！

更新は早くはない上に雑な文章になってしまっていますが、多間に
見てください。すいません。

第三話

『インフィニット・ストラトス』

通称、『IS』

十年前、稀代の天才科学者、篠ノ之束によって開発、発表された、高機動パワードスーツ。

宇宙進出を目的として開発されたISだが、開発者の意図とは裏腹に、現行兵器をはるかにしのぐ機動性や防御力、破壊力等に目を付けた国々は、ISを兵器として取り扱い、大規模な軍縮などを断行した。

しかし今は各国の思惑から、ISの運用に関する条約、『アラスカ条約』が締結され、あくまで『スポーツ』として落ち着いている。このようにして最強の兵器へと上り詰めたISだが、致命的な欠点が一つある、

それは、ISが女にしか扱えない代物であるということだ。

開発者の意図なのか、偶然に起こってしまった出来事なのかは不明だが、ISは女性にしか反応を示さず、女性にしか扱えない平気なのだ。

そのせいか今の世の中、女性はかなり優遇されている。いわゆる女尊男卑の社会形態となり、深刻な社会問題となっている。

コマ限界までIS関連の教育を行うこの学園では、入学式当日から授業がある。

そして今は一時間目のIS基礎理論授業が終わった休み時間なのだが、今のこの教室の雰囲気は、如何ともしがたいものである。

どうにかならんもんな、これは。

何しろ俺たち以外の生徒が全員女子。もちろんそれはこのクラスに限った事ではなく、この学園全体がそうなのだ。

女にしか使う事が出来ない兵器、IS。それが男である俺達が使えてしまった事は世界的ニュースとなり、当学園関係者から在校生まで全員が俺達の事を知っている。

そして今、このクラスの廊下には他のクラスの女子を初め、二、三年の在校生達が詰めかけている。しかし彼女等は、女子だけの環境に慣れてしまっているのか、ただ単に恥ずかしがっているだけなのか、もしくは両方なのかはわからないが、なかなか話しかけに来る者は出てこない。しかしそれは彼女等に限った事ではなく、クラス内にいる女子たちも同じなようだ。『あなた話しかけなさいよ』という言葉が小声で飛び交っているが、先を越されたくないのか、それを妨げるような空気が教室内に充満して重苦しい。

これは、一度人生を経験した俺としても非常に耐えがたいものがある。

——俺達は俗に言う、転生者なのだ。

転生

それは一度人生を全うした魂が、再び現世に産まれる事を言う。所謂、宗教思想であり、俺自身深く考えた事はなかったし、信じる気にもなれなかった。

しかし、現にそれが起こってしまったのだから信じるしかない。

最初の頃はこの状況にかなり混乱した。しかし、前世の記憶や知識が頭の中にあり、尚且つ、赤子にしては不釣り合いな、それらの事を考えることができる能力がある事から、これが来世である事が分った。

月日を追うことにして、最初の頃はおぼろげだった前世の記憶や知識を大分思い出す事が出来た。

自分が帝國陸軍の少佐であった事、陸軍省から増加参謀として近衛師団に出た事。

そして、自分の運命を決定付けた命令と、その任務さえも……

「この空気にはまいりますね、少佐殿」

窓に顔をやり、眼下に広がる学園の風景をぼんやりと眺めていると、ふと、前の席から小声で声を掛けられた。

軍が解体され、意味を成さなくなったその名で呼ばれ、思わず苦笑した。

「その「少佐」と呼ぶのはやめてくれませんかね、先生」

俺の前には、同じ前世を生き、同じように転生した野口孝吉がいる。

前世で、ある任務で行動を共にした彼は、全く変わらない、眼鏡を掛けた誠実そうな顔に苦笑を浮かべた。

「と言われましても、私からすれば少佐殿は、将校軍衣に金色の参謀飾緒を吊って、略帽に近衛徽章を付けた姿しか思いつかんですよ。同年代の学生だなんて、今になっても考えられないくらいに」

確かに、それは俺自身もずっと思っている事だった。

前世では皆、歳が離れていたのだが、来世で再びであったときは何故か皆同じ歳という不可解な現象が起こり、ひどく困惑したものだ。やはり前世での記憶があるからか、皆前世での呼び名で呼び合い、接している。最初の頃は改善を考えていたが、前世での接し方に慣れて直らず、どうしても良くなってしまった今日この頃である。

「見てくださいよ、アレ」

野口先生は俺達と離れた所に座っているもう一人の仲間を見る。かつての姿からは想像できないくらいに、ぐでえ、と机に突っ伏し、心身共にまいっている事が一目でわかった。

「だいぶまいってますな、アレは」

「ま、四方八方から視線を受け続けていれば、ああもなりますよ」

そう言っている野口先生は、自分達にも集中している女子たちの視線も、どこか吹く風である。さすがは、前世で女子校に勤めていた教員だけあって非常に慣れている。

だが俺自身、冷静を装ってはいるが実は内心、かなりまいっている。ずっと複数の女子からの視線を浴び続けるというのは居心地が悪すぎる。

「先程の自己紹介の時間が一番効いたんじゃないでしょうか？」

「あのノートの事ですか？」

「はい」

「いや、あんな目で見つめられたら何かしなくちゃなりませんし、しかしあの状況じゃ、自分達には何も出来そうにありませんでした」

我ながら、あの時ノートに書いた事は悪趣味だと思ったが、何も書かないよりはマシだとは思った。

彼の悲惨な様子を見て、ふと、一人だけ隣の二組に割り振られた寡黙な曹長の顔が頭の中をよぎった。

「曹長は大丈夫でしょうかね」

「おそらく、あの曹長殿の事ですから大丈夫でしょう」

確かに、前世でも来世でも無口で、友好関係に不安がある曹長だが、幾度もの戦場で二等兵から曹長に叩き上げたあの男には、俺が危惧するようなことは起こらないだろう。

「先生、そろそろ陣中見舞いにも行きますか、そうでもしないとアイツがノイローゼになる」

「確かに」

野口先生と冗談を言い合いながら席を立ち、今も机に突っ伏している中尉のところへ向かう。

先の件の詫びも入れねばな。

参った、まずい、これはダメだ、ギブだ。

終始女子たちからの視線に晒されて、俺のライフはもう既にゼロを通り越してマイナスまでいつている。

そんな感じに、心身の疲労で机に突っ伏していると、先程俺を見離した上、周りの視線など気にすることなく何やら談笑していた男二人がやって来た。

くそ、なんでこの状況で話ができるほど余裕なんだよ。俺にも少し分けてくれ…………

「大丈夫ですか？ 中尉殿」

眼鏡を掛けた誠実そうな顔を心配そうにさせて俺の顔を覗き込んでくる孝吉。コイツって本当に優しいんだよなあ。時々仏様の様に見えるてくる。

「大丈夫じゃなかったらこうしてないって」

「ま、そうだよな」

気力ゼロの俺の返事に司朗が付け加える。というか、お前も原因の一端だからな！

「というか司朗、お前あそこで見捨てるなんてなしだろ」

「いやすまん、でもあの状況じゃああするしかなかったもんだから」

「それで何故俺を見捨てるという事につながるんだ!？」

時々、コイツの考えている事が分らなくなる。箒と似て古めかしい喋り方をするあたりとか。孝吉あたりに対する、他人行儀な接し方とか。お互いを「先生」とか軍の階級で呼ぶあたりとか。

特に、俺の事をよく『中尉』と呼ぶ点だ。俺自身軍役に入った覚えはないし、ただの悪ふざけなのかもしれないが、司朗達は自然体でこう呼んでくる。その上俺自身『中尉』飛ばれる事に違和感を感じていない事も不思議だ。

「——ちよつといいか」

「え？」

突然話しかけられて振り替えると、目の前にいたのは六年ぶりに再会した幼馴染。

「……………ほ、箒？」

「……………」

篠ノ之箒。昔から変わらないポニーテールが特徴的な少女。身長は平均的な女子のそれだが、長年の剣道で培った体は、長身にさえも見える。少し不機嫌そうに見える瞳は本人曰く生まれつきなもの。そして、六年間の間でました様な感じがする、日本刀のような鋭い雰囲気。

間違いなく、俺の知っている箒である。

「廊下でいいか？」

教室では話にくい事なのだろうか。俺としては一刻も早く今の状況を脱したいので断る理由はない。

それに箒とゆっくり話したいと思っていたところだしな。

「……………まあ、いいけど」

「そうか。すまんが、一夏を借りるぞ」

箒はそう言って、近くにいた司朗と孝吉に断りを入れる。

「ああ、別にいいが」

「右に同じ」

二人も空気を呼んだのか、快く了承してくれた。やっぱり良い親友達だ。

「早くしろ」

「お、おう」

箒にせかされて慌てて席を立つ俺。スタスタと廊下に行ってしまう箒を追う。

「……………少佐殿、もしかしてあの子も」

「……………ええ、恐らくは、オチてますな」

二人が後ろで何やら喋っていたが上手く聞こえなかった。しかしそんな事はどうでもいいと、俺は、箒の、

俺の初恋の相手の後を追った。

第三話（後書き）

はい！　ここで思い切って原作ブレイクを試してみました！
個人的には一夏× 第の方がいいと思っているクチなので。

今後もこの二人をデレッデレにさせていきたいと思しますので、
楽しみにしてください！
楽

第四話（前書き）

この前、長く使っていたパジャマのズボンが裂けてしまった睦城矢刺です！

第四話です！

色々と無理がある点があると思いますが、気にせずに楽しんでください。

第四話

一夏 Side

簞に連れられて廊下に出た俺達だが、どちらも喋らずに気まずい空気が流れている。

なんだよ、呼び出したのはそっちなのにダンマリか？

「……………そう言えば」

「な、なんだ？」

意を決して俺から話しかけると、簞は慌てて身構えた。何故？

「去年、剣道の全国大会で優勝したんだってな。おめでとう」

「……………」

俺の言葉を聞くなり、簞は口をへの字に曲げて顔を赤らめた。これは照れているな、可愛いヤツめ。

「そ、そういうお前だって、男子の部で全国優勝したそうではないか。知らなかったぞ」

「ああ、まあな。一応会いに行こうとは思ってたんだけど、その時には簞はもう表彰式も終えて帰っちゃった後だったから」

あの時俺は、全国大会の会場で、簞が女子の部に出ている事を知

っていた。こちらの試合が終わった後に会いに行こうとしたのだが、その時にはもう篤は帰った後で、結局会えずじまいだったのだ。

「あゝ、あと」

「な、なんだ!？」

「久しぶり。六年ぶりだけど、すぐ篤だって分ったぞ」

「え……………」

「なんというか、綺麗になった／＼／＼／＼」

「／／／／／／／／／／」

…………… なんだか、自分で言ってきた恥ずかしくなってきたな／／／／／

というか篤、耳まで真っ赤にして照れるのは、それはそれで可愛らしいけど、黙りこくるのだけはやめてくれ、無茶苦茶気まづくなる。

キーン コーン カーン コーン……………

ここで、天からの助けの如く二時間目の開始を告げるチャイムが鳴る。

「…………… も、戻るか／／／／／」

「わ、わかっている／／／／／」

俺は箒と一緒に、若干駆け足で教室に戻った。顔を赤らめながら、
だが。

真柴 Side

「あれはオチてますね、先生」

「オチていますな、少佐殿」

鐘が鳴り、顔を赤らめながら戻って来た二人を見て、俺と先生は
言葉を交わした。

中尉は中学の頃から、前世と同じその容姿と見境いの無い優しさが
災いしてか、数多くの女性を惚れさせている。おまけに、当の
本人に自覚がないのだからタチが悪い。その上恋愛に疎い鈍感体質
ときているから困ったものである。

「あの娘も可哀そうに」

中尉と別れ、自分の席に座った娘に目をやる。

艶やかな黒髪を結いあげ、凜として雰囲気を出している彼女は、
女と言うよりは侍に近い。先程の、中尉の彼女に対する呼び方から、
彼女が、中尉が以前話してくれた幼馴染の篠ノ之箒である事が分つ
た。その身は剣道をたしなんている者のそれで、相当なつわもので
ある事が分る。

「しかし存外、中尉も彼女に気があるのでは」

「同感ですな」

中尉が毎回、篠ノ之箒に関する話題を話す時の様子は、完全に恋人について話すそれであった。

しかしあの様子では、お互いに、自分の心内を明かせていないよう。どちらも不憫としか言いようがない。

「私としては、二人には是非とも付き合ってほしいものです」

「自分も同感ですな」

野口 Side

「——であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の承認が必要であり、枠内を脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ——」

二時間目の授業、担当の山田先生は教壇に立ってスラスラと教科書を読み上げ、俺等はそれに合わせて、教科書をめくり、ノートを取る。

特異な内容を差っ引けばそれは、俺がかつて勤務していた女子高でも当たり前だった授業風景だ。

といつても、今の俺からしてみれば、今ノートに書き込んでいる内容はまるで別世界のそれであるのだが、とある理由で、以前からISに触れることが多かった事と、事前に配られた参考書に一度目を通したおかげで、何とかついていけている。

後ろの席に座っている少佐殿も、隣のクラスで同じように授業を受けている曹長殿もその例に漏れないが、どうやら中尉殿は違ったようで、先程からあたふたと辺りを見回している。

「織斑くん、何か分らないところがありますか？」

中尉殿の様子に気付いたのか、山田先生がわざわざ訊いてきた。

「アレは絶対に分ってませんね」

後ろに座っている少佐殿が、僕と同じ考えを口にする。

「そのようですね、参考書はちゃんと読んだんでしょうか」

「読んでいてならああらんでしょう」

確かに。現に中尉殿は先から、一向にシャーペンを動かしていない。

「先生！」

「はい、織斑くん！」

「殆ど全部わかりません！」

「……え？ ……ぜ、全部、ですか………？」

中尉殿のまさかの返答に、山田先生はしばし呆然とする。どうやら少佐殿の予想が当たったようだ。

すると、教室の隅に控えていた織斑先生が中尉殿に尋ねる。

「……………織斑、入学前に配った参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パンツ！

「必読と書いてあったろうが、馬鹿者」

もう人間をやめているのではないかと思えるほどの速さで中尉殿との距離を詰めて、その頭を出席簿で叩く織斑先生。相変わらず容赦がない。

「再発行してやるから一週間以内に覚えろ、いいな？」

「い、いや、あの辞書みたいな分厚さはちょっと」

「やれと言っている」

「………はい、やります」

有無を言わせないその表情に折れてしまい、目に見えてへこむ中尉殿

「帝大主席の頭なら楽でしょうに」

「まだ『記憶』が蘇っていないのでは？」

「だとしたら、中尉も苦労しますな」

全くその通りである。

「え、えっと、織斑くん。分らないところは放課後にでも教えてあ

げますから、頑張つて？　ね？　ねっ？」

落ち込んでいる中尉殿を山田先生が励ましに入るが、身長之差からみると、逆に中尉殿が教師で、山田先生が生徒と言われた方がしっくりとくる。

「はい。それじゃあ、また放課後によろしくお願いします」

「ほ、放課後……放課後に二人きりの教師と生徒……あっ！　だ、ダメですよ、織斑くん。先生、強引にされると弱いんですから……それに私、男の人は初めてで……」

頬を赤く染めて悶えている山田先生を見ると、かつて教鞭をとっていた者として、非常に先が不安になってくる。

「で、でも、織斑先生の弟さんだったら私は別に……」

「んんっ！　山田先生、授業の続きを」

「は、はいっ！」

妄想にふける山田先生を、織斑先生が咳払いで呼び戻す。

山田先生は慌てて教団に戻ろうとして……いきなり転んだ。

「うっ、痛たたた……」

……山田先生を見ると、彼女がどうやって教員になれたのか、非常に疑問に感じる。

第四話（後書き）

初の野口先生視点です！

今回の作品を作るにあたって一番難しかったのは、やはり転生してきた人たちの喋り方でした。

やはり今と昔ではしゃべり方が違う上に、真柴少佐に至っては軍人ですからね。

なにはともあれ、今後とも頑張っていきます！

第五話（前書き）

五話目です！

今回は『日輪の遺産』から新キャラが登場します。

表現が下手かもしれませんが、楽しんでいってください！

第五話

真柴 Side

「災難だったな、中尉」

二時間目が終わった後、見事にへこんでいる中尉の所に、野口先生と一緒に来た。

中尉は見るからにゲツソリとしており、若干老けても見える。

「まったくだよ。はあ、今日から勉強漬けた」

そう言つて中尉は頭を抱える。確かに、あの辞書みたいな参考書を一週間で覚えるなんて、たとえ『帝大主席』の頭を持つてしても無理がのかもしれない。自慢ではないが、陸軍幼年学校と陸軍士官学校を経て、陸軍大学校で恩賜の軍刀を賜った俺でも、あの量はちと骨が折れた。

「大丈夫ですよ。勉強に関しては僕たちが手伝いますから。ね？
少佐殿」

慰めの意味を持つて中尉の肩を叩く先生が、俺に話を振ってくる。確かに、勉強の手伝いならば断る理由はない。俺達は以前から、『とある所』でISに触れ、それを学ぶ機会があったが、中尉にはそんな機会がなかったただけなのだ。

「大丈夫ですか？ 中尉殿」

するとここで、新たな人影がやって来た。

「ん？ 敬子か」

鈴木敬子。^{スズキ ケイコ} 中学からの同期であり、俺たちと同じ転生者。野口先生の最後の教え子でもあった少女だ。

今も昔も変わらない、腰元まである艶やかな黒髪に透けるほどに白い肌。『大和撫子』という言葉がしつくりとくる容姿の彼女は、中尉の顔を心配そうに見つめている。

周りから『また先を越された！』、『なんなのっ？ なんなのあの子！？』等の言葉が上がるが気にしてはいけない。

「まあ、大丈夫だから、心配すんな」

とても大丈夫には見えないが、中尉は笑顔で彼女に手を振る。そうでもない、気丈な性格の彼女はずっと心配し続けてしまっただ。

「そうですか。何かあったら言ってくださいね」

「ああ、ありがとう」

「…………ちよつと、よろしくて？」

「へ？」「ん？」「え？」「なにか？」

突然後ろから声を掛けられて振り向くとそこには、わずかに口―ルがかかった鮮やかな金髪に、白人特有の透き通ったブルーの瞳をやや吊り上がらせた状態で俺たちを見ている少女だった。

人を蔑むようなその視線に組んだ腕、高貴なオーラが感じられる

その姿は、いかにも、このご時世に女子のそれだ。

ISの影響により、女性の立場は過剰すぎると言えるほどに優遇されている。そのせいなのか、女々しいという構図が成り立ってしまい、男の立場は一気に、奴隷や、労働力程度に成り下がってしまった。

俺の目の前にいる少女はそれを具現化したようなたたずまいだった。

「訊いてます？ お返事は？」

「あ、ああ、訊いているよ。確か、英国代表候補生のセシリア・オルコットさんだったよね」

事前に、『ある筋』から聞いた話で、彼女が英国代表候補生のセシリア・オルコットである事を思い出した。なんでも、英国の有力貴族の出なのだから。

「ふん。あなたは多少は礼儀というものが分っているようですね」
鼻を鳴らしながらそう言うオルコットの礼儀は、もはや傲慢としか言いようがないものだった。

「あ、質問いいか？」

と、ここで、俺とオルコットの会話を傍観していた中尉が手を挙げる。

「まあ、下々の者の要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

ガタツ、と、聞き耳を立てていた数名の女子がずっとこけた。

「あ、あ、あ……………」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの！？」

鬼でも逃げだしそうな剣幕で中尉に詰め寄るオルコット。確かに先のは、俺も一瞬耳を疑った。例え知らなくても、その単語である程度理解はできるはずだ。

「おう、知らん」

「……………」

真正直に言う中尉に、怒りを通り越して呆然となるオルコット。気持ちにはわからない訳でもない。

「中尉殿。『代表候補生』っていうのは国家代表IS操縦者の候補生として選出される。一種のエリートなんですよ」

補足を入れる野口先生。これで中尉も『代表候補生』の意味が分つたろう。

「そう！ エリートなのですわ！」

すると、さっきまで呆然としていたオルコットが復活した。エリ

ートと称されるのがうれしいのか、無駄にいい元気だ。

「本来ならわたくしの様な選ばれた人間、同じクラスになれる事だけでも奇跡、幸運なのですわよ。その現実を少しは理解していただける？」

「そーか、ラッキーだ」

中尉、その態度は相手の神経を逆なでするだけなのではないのか？

「——馬鹿にしていますの？」

案の定怒ったオルコット。

「大体あなた方、ISについてロクに知らないくせに、よくこの学園には入れましたわね。男のIS操縦者が現れたと聞いていたから、少しくらい知的さを感じられるかと思っていましたのに……」

「……………黙りなさい」

急に、オルコットの自画自賛名演説を、弦を弾いた様な澄んだ声が遮る。それは鈴木だった。彼女は、恩師を侮辱されたからか、怒っている事は明らかで、その気丈な瞳はオルコットを捉えて離さない。

「これ以上、私の大切な人達を侮辱するのは許さない。たとえ、英
国代表候補生のあなたでも。」

前世では、海軍大佐と華族令嬢の娘であつた鈴木は、深く捉えら

れた瞳でオルコットを睨む。

「な、なんなんですよ！？ あなたは！？」

オルコットは鈴木ににらまれたたじろぐ。俺も以前、あの瞳でにらまれた事があったが、その時はとても肝を冷やした。

キーン コーン カーン コーン

「っ……………！ また後出来ますわ！ 逃げないことね！ よくって！？」

オルコットは耐え切れなくなったのか、鐘の音を聞いたとたん彼女は捨て台詞を吐き捨てて、足早に去って行った。

鈴木は、相当頭に血が上っていたのか、いまだに肩を小刻みに震わせている。彼女のそばにいた野口先生は、その震えを抑えるようにそっと、鈴木の肩に手を置いた。

「もういい、鈴木。俺等の為に怒ってくれてありがとな」

すると鈴木は、落ち着いたのか震えが小さくなってきていた。そしてそのあと「失礼しました」、と一礼をして、自分の席に戻って行った。

第五話（後書き）

如何だったでしょうか？ 鈴木さん登場偏は。

実は彼女、『日輪の遺産』では名前が出てこなかったので、それっぽいのを考えてみました。

今後もこんな感じに新キャラを出していきたいと思いますので、どうぞ楽しみにしていてください。

ではまた！

第六話（前書き）

更新遅れてしまつてすいませんでした！
遅れてしまった分、中身は詰まっているので楽しんでください。

第六話

一夏 Side

セシリア・オルコットと一悶着あつた次の授業。一、二時間目と違い、山田先生ではなく千冬姉が教壇に立っている。よっぽど重要な事なのか、山田先生は手にノートを持っていた。

「この時間では、実践で使用する各種装備の特性について説明するが、その前に、再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」

クラス対抗戦？ 代表者？ 何だそれ？

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席、言わばクラス長だ。ちなみにクラス対抗戦では、入学時点での実力を測るものだ。現時点での差はたいていないが、競争は向上心を生む。ただし、一度決まると一年間変更はないからな」

……… なんか、めんどくさそうだな。

クラス長を決めるといふ事は、それによつて決められた奴は一年間、面倒な試合や仕事に出なければならぬ訳で。ご苦労さまとしか言いようがないな。

「はいっ、織斑くんを推薦します！」

「私は真柴くんを推薦します！」

「じゃあ私は野口くんを！」

……… チョットマツテクダサイヨ。イマナンティッタ？

「では候補者は織斑一夏。他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

「ちよつ、ちよつと待った！ 俺はそんなのやらな——」

パンツ！

思わず立ち上がったら叩かれた。というか千冬姉、威力がとても出席簿の出せるものとは思えないんだけど。今も出席簿からプスプスと煙が上がってるし。

視線を窓側にずらすと、他薦されたというのに余裕な調子で俺と千冬姉のやり取りを観察している。

毎度毎度思うが、その余裕差はどこから出てくるんだ？ 一ミリグラムでもいいから分けてくれ。

「自薦他薦は問わないと言ったはずだ。他薦された者に拒否権などない。選ばれた以上は覚悟を決めろ」

取り付く島なしの千冬姉。くそう、何か突破口はないのか？

「じゃ、じゃあ司朗たちはどうなんだよ？ 思いつきり他薦されていたじゃんか！？」

あの時、俺と一緒に司朗や孝吉も他薦されていた。なのに千冬姉は俺の名前だけを口にした。これは一体どういう事なんだろう？

「真柴と野口か。二人は訳あって代表になる事も、対抗戦に出る事

も出来ないんだ。だから、たとえ自薦したとしても、代表にはなれない」

千冬姉の言葉に教室がざわめく。代表になれない理由？ 何なんだそれは？ というか二人がさつきから余裕だったのはこれを知っていたからか。

パンッ！

「そのような選出は認められません！ 男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ このセシリア・オルコットにそんな屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

机を叩く音と同時に大きな声が聞こえてきた。声がする方に振り向くと、秋ほど俺たちに突っかって来た英国代表候補生、セシリア・オルコットが憚然とした表情で俺を睨んでいる。

「いいですか！？ クラス代表とは実力トップがなるべきものであって、極東の島国の猿がなるべきではないのです！ わたくしはサーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

エンジンがかかってきたのか、すごい剣幕で罵声を並べるオルコット。というか、とうとう人から扱いが変わっているな、俺。いい加減イライラしてきたぞ。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはならない事自体が、わたくしにとっては耐え難い苦痛で——」

プッン

「イギリスだって大した自慢ないだろ。世界一不味い料理で何年覇者だよ」

「そんなにこの国が嫌なら、さっさと尻尾を振って国に帰ったらどうなの？ ライミー」

「なっ……………！？」

オルコットの言葉を、俺と敬子が遮る。俺達の言葉を聞いた瞬間オルコットは、顔を真っ赤にして怒りを示す。

さすがに、祖国を侮辱されてまで落ち着いていられるほど、俺も器用ではない。敬子も、握り締めた拳をブルブルと震わせている。相当頭にきているようだ。

普段は温厚な彼女だが、こうなってしまうともう取り返しがつかない。ご愁傷さまだな、オルコット。

「あつ、あつ、あなたねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「先に侮辱してきたのはそっちだろ！」

「っ……………決闘ですわー！！」

凶星を突かれたのか、もう殆どヤケになったとしか言いようがないオルコットの『決闘宣言』。沸点低いなアイツ。俺が言えた義理じゃないけど。

「おついいぜ。四の五の言うより分りやすい」

「どこからでもかかってきなさい。さもないと、その喉元をかき切るから」

……鈴木サン？　あなたそんな台詞言うような人でしたっけ？
オルコットを見てみる、お前に睨まれているお陰で、生まれたての小鹿みたいに足が震えているし、周りにいる女子達もメツチャ涙目になっているぞ。

「ふ、ふん。ハ、ハンデはどのくらいひ、必要かしら？」

オルコット。声が震えているぞ、あまり無理して見栄を張ろうとするな。

「いるか、そんなもん」

女相手にハンデを付けられたとあつては、それでこそいい恥さらしだ。

しかし、俺がハンデを拒否した直後、教室の中から幾つもの失笑が上がる。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強いなんて、大昔の話だよ」

「男と女が戦争したら、男は三日もたないっていわれているんだよ」

……忘れていた。今は女尊男卑。『女は強い』という構図が当たり前だったんだ。

その時、

「……そこまでしておけよ、小娘共」

今まで事態を傍観していた千冬姉が、底冷えするような声を発した。

これにより、今まで騒いでいた女子たちやオルコット、もちろん俺や敬子は黙り込む。

「ガキの喧嘩に口をはさむ趣味はないが、まずは、お前たちは重大な思い違いをしている事は気付かねばならんな」

そう言って千冬姉は、同じように事態を傍観していた司朗の前に立つ。

「真柴。こいつ等の勘違いを直してやれ」

真柴 S i d e

「真柴。こいつ等の勘違いを直してやれ」

俺の前に立ち、有無を言わせない表情で命令してくる千冬さん。ここで俺に話を振ってくるというのは、俺がそれをできると信じてくれているからなのか、ただ単に面倒くさがっているだけなのか。どっちにしろ、発言の機会を与えてくれたのは有難い。俺自身、彼女等の勘違い訂正したいと思っていたところなのだ。

「……………分りました」

俺はそう言って席を立ち、教室内を見わして喋りだす。

「まず、『男は女より弱い』というものに対しての持論を述べさせてもらう」

一息置く

「これに関しては極めて簡単だ。まず、この女と男の強さを比べるとき、その『条件』がフェアじゃない事が原因だ」

「その『条件』って？」

女子の一人が質問し、答える。

「この時、両者ともフェアな条件で戦っていないからだよ。大方これを考えた人は、『男を生身で、女にISを持たせた状態で戦わせたらどうなるか?』と考えてしまったんだろう。IS対生身、これでは生身の方が勝つなんてまずあり得ない。だが」

「だが、なんだよ?」

応えが速く聞きたいのか、中尉がせかしてくる。

「……………男と女、両者とも生身ならば、この定義は崩れ去る。」

瞬間、ハツとした空気が教室にあふれる。同年代や生活環境が同じ、フェアな条件の下で、男と女が生身で戦えば、体力面で男に劣る女が勝つことはありえないからだ。

「ま、『両者ともISを使ったらどうなるか』になったら、経験や技術などによって結果は疎らになるから、あんまり当てにならない

んだがな」

ざわめきが鎮まった頃を見計らい、新たな話題に入る。

「次に、『男と女が戦争をしたら三日もたずに男が負ける』というものだ。これも簡単な話、兵士の質が問題なんだよ。ISが登場して以来、軍隊は大規模な軍縮と共に、一般兵士や将校たちの教育をおろそかにしてしまった。……そして、中でもひどいのが女性軍人達だ」

「待ってください！ 女が男より劣るなど、ありえせんわ！」

「オルコット、少し黙っている。話が進まん」

女が男より劣ると言われオルコットが声を荒げたが、千冬さんが一睨み下だけで黙り込んだ。

視線で彼女に礼を言ってから話を続ける。

「皆の知っている通り、IS登場以来女性優遇となった社会では、組織などにおける女性の昇進率が高くなった。軍隊もその例にもれず、『女だから』という理由だけで、知識や技術が十分でない女性軍人達が次々と昇進していった。IS登場以前の、同階級の女性軍人と比較してみればわかる事だ。ましてや、大昔から戦いに身を置き、女より体力が勝る男性軍人となんて、比べるべくもないことだ。」

この時ばかりは、陸大で養った観察眼に感謝した。それがなければ、こんな大層な演説は出来ないからな。

「それだけじゃない。皆に聞くが、ISの心臓部たる、コア以外を

作っているのは誰だ？」

コア。それは文字通りISの心臓部となる代物で、その中身は全てが解析不能のブラックボックス。開発者の篠ノ之束以外には開発できないとされている。

だが、

「それはもちろん、倉持技研とかが」

俺の問いに、女子の誰かが返答する。『倉持技研』とは、日本国内有数のIS研究所だ。しかしそれは確実な答えではない。

「では、技研で働き、ISの機体を作っているのは、どんな人かな？」

「それは技術者の人達とか」

「その技術者達の性別は？」

「……………あ！」

ようやく気付いたようだ。

「そう。その殆どが男なんだよ。性別上、戦争となれば彼等は男の陣営につくだろう。敵の兵器の性能や兵装、そして、IS以外の兵器でも撃破できるほどの弱点すらもよく知る彼等がね」

コアはともかくとして、自分たちが作った機体だ。その機体のどこが弱点なのかくらいよく知っているだろう。たとえば、小銃やミサイルでもISを撃破できるほどの弱点を。

「破壊の方法は何もそれだけじゃない。敵陣営に間諜を送り込んで、ISを整備するふりをしてコアを抜き取るなり、破壊するなりすればいい。アクセサリー状の待機状態となる専用機の場合は、そうだな、所有者のすきを突いて盗むなり、破壊するなりすればいい。なにも、『戦闘中に破壊しなければならない』なんて法はないんだからな。」

兵器や補給物資の破壊なんて、輸送途中に攻撃をするなど、他にも方法は五万とあるからな。

「それに、ISの機体開発に携わった技術者たちが、対IS用の特殊兵器を開発することだってあり得る。攻撃兵器に限らず、戦車や戦闘機、艦船の装甲やエンジンなどもだ。それに……………」

一呼吸置き、無意識に微笑を浮かべながら、言葉を紡ぐ。

「もし戦争となれば、君等と同じようにISに乗れる男が四人敵に回る事を、忘れないように」

ISの弱点を突かれ、とうとう反論できなくなる女子達。熱を燃やしていたオルコットでさえ、すっかり熱がさめたように黙りこくり、中尉は先程の話に感心したのか、感嘆の表情でいる。前の席に座っている野口先生はこの展開が見えていたようで、鈴木と共に苦笑を浮かべている。

彼等の様子を見て、調子に乗って少し言いすぎたかもしれないと内心後悔する。

「私から補足だが」

ここで千冬さんが補足を入れてくる。

「野口はともかくとして、織斑は剣術で私と互角の腕前を持っており、真柴についてはもはや論外、全盛期の私でさえ瞬殺するほどの腕前だ。お前たち小娘にかなうような奴らではない。たとえば、ハンデを付けてもらったとしてもな」

「「「「「えっ！？」「」「」」」」

千冬さんの余計な発言により、驚愕の声を上げる女子たち。確かに俺はかつて千冬さんに手合わせを頼まれた。陸士時代、伊達に剣術を磨いてきたわけではなかったし、自信もあつたので了承した。そして勝った。瞬殺などと言われてはいるが、試合をしている側からすればいまいち実感がわからない。

中尉については、俺と千冬さんとの勝負に心動かされたのか、俺に剣の手ほどきを頼んできた。前世では軍が解体され、軍人でなくなつた後、金原邸の離れで剣道場を開き、実際に門弟を抱えていた経験があつたので断る理由はなかった。しかし、僅か二、三年そこから、人類最強の腕前を持つ千冬さんに喰いつく事が出来たのは、中尉自身の才能のお陰だ。

未だに信じられないという表情をしている女子達に、千冬さんは不敵な笑みを見せる。

「『信じられない』という表情カオだな。では、真柴」

「はい」

「放課後、道場に来い。こいつらの『思い違い』を正してやれ」

「…………断る理由は、ありませんね」

「よし、それでは全員、放課後、私の言っている事かどうか確かめたいものは道場に来い。織斑とオルコットの勝負については、一週間後の月曜、放課後に第三アリーナで行う。両者は準備をしておくように。それでは授業を始める」

半ば強制的だが、こうして俺と千冬さん、中尉とオルコットの勝負が決定した。

第六話（後書き）

今回は真柴少佐の演説でした。

この演説の内容は、自分なりに「男対女の戦争で、男が勝つにはどうしたらいいのか」というのを考えて書いたものです。

文章が多くて疲れてしまう上に、原作人物達の描写が少なかった今回。楽しんだくれたら幸いです。
ではまた！

第七話（前書き）

最近どんどん更新が遅くなってきたしまいました。やっぱり大変ですね、小説書くのって。

第七話

一夏 Side

放課後、IS学園内にある剣道場。

今から、三時間目での千冬姉の暴露により司朗の強さを証明するために行われる、司朗と千冬姉の剣道の試合が始まる。

剣道場には、俺と箒と敬子、一年一組のクラスメイト達が大勢つめかけている。しかし、他のクラスの女子や、二、三年の先輩方もいるのはなぜだ？

「おそらく皆、真柴の強さを確かめたいのだろう」

俺の考えを呼んだように喋る箒。なんで俺の周りには人の心が読める奴が多いんだ？

「で、実際はどうなのだ？」

「どうって？」

「さっき教室で千冬さんが言っていた事だ。真柴はどのくらい強いのだ？」

剣道を嗜むものとして興味ができたのか、司朗の事について訊いてくる箒。

面白くない。なんで面白くないのか分からないけど面白くない。

「まあ実際、千冬姉の言っている事は本当だ」

「なっ！ ほっ、本当だったのか！？」

「うわっ、ちょ、いきなり大声出すなよ」

「うっ、す、すまない」

いきなり大声を出したことを咎められて、シュン、と縮こまる篤。
これはこれで可愛いな／＼／＼／

「でも信じられないよ、織斑先生が負けるだなんて」

俺の後ろで首をひねるA子さん（ゴメン名前知らない）。確かに、人類史上最強の強さを持つ千冬姉が負けるなんて、到底想像できたものではないな。でも、

「見ていればわかるさ」

笑顔でA子さんに応えると、Aさんどころか周りの女子達も顔を赤くしていた。風邪か？ そして篤は何で俺を睨んでくるんだ？

「…………… 此处におりましたか。中尉殿」

「ん？」

不意に声を掛けられて振り向くとそこには、俺が非常によく知る男が立っていた。ガツシリとした体躯に寡黙そうな表情、歳不相応なだみ声を持ったソイツは、『歴戦の兵隊』と言った雰囲気かブンする。

「ああ、庄造か」

俺の親友の一人であり世界で初めてISを動かした男子の一人、そして、司朗達と同じく俺の事を『中尉』と呼んでいる金原庄造^{キンバシヨウソウ}である。

「なんでも少佐殿が千冬さんを手合わせすると訊いたもので」

相変わらず、俺や司朗達に対して敬語を使う庄造の斜後ろには、もう一人の親友、金原久枝^{キンバラヒサエ}が、まるで夫に付き添う妻の様に立っている。

ちなみにこの二人、名字から分る通り親戚関係であり、また、俺たちの仲間内では唯一の恋人同士でもある。

しかしこの二人、恋人同士なのにあまり甘えた雰囲気がない。俺が幻想を持ち過ぎているだけなのかもしれないが、それはまるで、頑固な夫を蔭ながら支える妻と言ったところか。とてもお似合いな二人である。

久枝は、俺の視線に気付くとほほ笑みながら浅く頭を下げた。
うゝむ。なんか男尊女卑時代の女性みたいな仕種をするよな。久枝といい、敬子といい。

「おい」

「ん？　なんだ？」

庄造と喋っていると箒に声を掛けられ、箒が指をさしている方向に顔を向ける。

指差す先、道場の中央にはいつの間にか、スーツと制服姿のまま、お互いに木刀を持って対峙する千冬姉と司朗、そして審判だろうか、孝吉が少し離れた場所で、二人を見守る様に立っている。

「……………始まる様ですな」

三人の様子を見て庄造は、肉体が喋っている様な強く、簡潔なだみ声で呟いた。

「大丈夫でしょうか、少佐殿」

司朗の実力を知っていても、やはり不安になってしまつようで、庄造と一緒にいる久枝は心配そうにしている。

「大丈夫だよ」

その心配を取り除くように言葉を発したのは、今まで口を開かなかった敬子だった。その表情は、底知れない自信に満ちていた。

「少佐殿は負けないよ。絶対に」

その言葉にはしっかりと、司朗に対する確信があった。

野口 Side

多くの観客に囲まれる中、道場の中心で、お互いに木刀を手に対峙する少佐殿と千冬さん。

そんな二人を見守る様にして立っている俺は今、二人の試合の審判を頼まれて此処にいる。というのも、以前千冬さんが少佐殿と手合わせした時も、偶然そこにいた俺が審判を引き受けた事があるので、断る理由もなかった。慣れていると言った方がいいのかもしれない。

今、千冬さんから感じるのは好敵手を前にし、気分が高揚している剣士の雰囲気で、少佐殿から感じるのも、まさしく軍人のソレだ。

「始め！」

二人の覇気を感じたのか、観客達のざわめきが収まって来たところではじめの合図を入れる。

お互いに一礼してから木刀を中段に構える二人。しかし構えた後、どちらから仕掛けようとはしない。お互いに隙を探しているのか、木刀すら動かさずに、じっとお互いを見据えている。

「……………」

二人が発する雰囲気は飲まれ、周りにいる観客達は息をのむ。俺自身も、冷静を装ってはいるが立っているのが精一杯な状態だ。道場内は重たい沈黙に包まれ、満開の桜のざわめきがやけに大きく聞こえる。

「……………ふっ」

息苦しい空気の中、先に動いたのは千冬さんだった。

振り上げた木刀を少佐の頭上めがけて振り下ろすが、それはすぐに少佐殿が木刀で受け止める。木刀はそのまま、そこで動きが止まるものと思えた。が、そうはいかなかった。

少佐殿は、千冬さんの木刀を受け止めるのとほぼ同時に、自身の木刀の切先を下に下ろしたのだ。

「なっ！？」

重力に従い、千冬さんの木刀はそのまま下に振りおろされ、その隙に少佐殿は千冬さんの背後にまわり、木刀を腰ために構える。

「くっ」

千冬さんは急いで背後にいる少佐殿を捉える為、振り下ろした木刀の向きを変え、横に薙ぐように振り払う。が、時すでに遅し。木刀は、振り切られる直前に少佐殿が放った木刀によって上に弾き飛ばされ宙を舞う。

「……………はっ」

そして少佐殿は、止めと言わんばかりに上げ切った木刀の向きを変え、千冬さんの喉元にそえる。

カァンッ！

そして同時に、宙高く舞い、道場の床に落ちてきた木刀の固い音がゴングとなった。

「……………え？」「……………」

あまりの早業に、何が起こったのか分からずに混乱する観客達。それほどまでに決着がつくのが速すぎた。まさに瞬殺だった。

「一本、そこまで！ 勝者、真柴司朗！」

自分の得物を弾き飛ばされ喉元に木刀をそえられた千冬さんと、木刀をそえている少佐殿。勝者がどちらかなんて、火を見るより明らかだった。そして、俺が終了の合図を言った途端、

「…………え、う、噓。勝っちゃったの？ 真柴くん」

「かつ、かつ、勝っちゃった！ 織斑先生に勝っちゃった！」

「うわー！ すごい！ 真柴くんって実はものすごく強いんじゃない？」

等、勝負の一部始終を見ていた観客達から黄色い声が幾つも上がる。それもそうだろう。何せ今まで『人類最強』と称されてきたブリュンヒルデ、織斑千冬が年下の、しかも男に瞬殺されたのだから。真柴少佐殿の腕前を知らない面々からしてみれば、衝撃的な事だろう。

「野口先生」

驚く観客達を見ると、少佐殿から声を掛けられた。もうすでに最後の一礼が終わったらしく千冬さんも来ている。

「なんですか？」

「いやなに、審判を引き受けてくれた礼をと思ってね」

「そうでしたか。別にいいのに」

少佐殿とそんなやり取りをしていると、観客達の中から中尉殿と曹長殿、篠ノ之さん、そして鈴木と久枝がやって来た。

「いい試合だったな、司朗」

「ありがとう。中尉。曹長も来てくれたのか、級長まで」

心の底から、先の試合のことをほめる中尉殿と、わざわざ試合を見に来てくれた曹長殿と金原に礼を言う少佐殿。皆は結果が見えていたのか、観客達より落ち着き払っているが、篠ノ之さんは、先の試合が信じられずに呆然としている。

「……………しかし」

と、ここで、先から俺たちの事を腕を組みながら見守っていた千冬さんが口を開く。

「私自身、以前真柴と手合わせした時よりは実力は多少なりともついたとは思っていたが、また敵わなかったか」

その顔にはありありと無念の表情が浮かんでいる。よほど悔しかったらしい。

「そんなに沈まないで下さいよ織斑先生、貴女は確実に強くなっています。だから自信を持ってください」

沈んだ表情でいる千冬さんを励まそうと、その肩を叩く少佐殿。これではまるで年齢的立場が逆である。実際その通りではあるが。

「ああ、いました。織斑くん、真柴くん、野口くん、金原くん」

「……………はい？」

呼ばれて顔を向けると人ごみの中、副担任の山田先生が書類を片手にやって来た。

「えつとですね、皆さんの寮の部屋割が決まりました」

「一週間は自宅通学だったのでは？」

俺達四人に部屋番号の書かれた紙と鍵を渡していく山田先生に疑問を投げかける曹長殿。将来有望なIS操縦者を保護する目的で、IS学園の生徒は全員寮生活を義務付けられている。

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割を無理やり変更したんです。政府からの圧力で」

そう言つて疲労感たつぷりに頂垂れる山田先生。きつと部屋割に苦労したのだろう。曹長殿も、今の説明で納得がいったのかこれ以上言及しようとはしなかった。

次に口を開いたのは中尉殿だった。

「それで、部屋はわかりましたけど、荷物は一回家に帰らないと用意できないですし、今日はもう帰っていいですか？」

「あ、いえ、荷物なら——」

「私が手配しておいてやった。有難く思え」

千冬さんが復活した。

「真柴達の荷物はそれぞれ届けられているが、織斑に関しては私が用意した。着替えと、携帯電話の充電器があれば十分だろう」

「あ、ありがとうございます」

「詳しい事はその紙に書いてあるので目を通しておいってください。
えっと、それじゃあ私たちは会議があるので、これで。皆さん、ち
ゃんと寮に帰るんですよ。道草喰っちゃダメですよ」

道場を出ていく千冬さんと山田先生を見送った後俺たちは、自分
に割り振られた部屋の番号を確認していく。

「俺は1023号室か」

「あ、同じですね。どうやら私は曹長殿と同室の様です。少佐殿と
中尉殿は？」

「俺は1024号室です」

「俺は1025号室」

「ちなみに、私とスーちゃんは1022号室です」

「じゃあ皆隣同士みたいだな。そう言えば箒は？」

「わ、私は、その………」

「？」

急にモジモジしだした篠ノ之さんに困惑の表情を浮かべる中尉殿。
何があったのだろうか？

「……………1025号室」

「……………はい？」

篠ノ之さんの部屋番号を聞き、しばし呆然とする中尉殿。

「つまり」

埒が明かないと思ったのか、間の手を入れる少佐殿。

「中尉と篠ノ之は同室、つまりは同居相手と言う事になるな」

「「……………ええっ!?!」」

少佐殿の指摘に、顔をそろえて真っ赤にする二人。やはり、想っている相手と同居するという事に恥ずかしがっているようだ。

「えっ、ちょ、ま、ほ、筈とど、ど、ど、同居って、ええっ!?!」

「ど、どういう事だ! 男女七歳にして同衾せず! 常識だろ!」

「しかし決まってしまったものには変更は効かんと思うぞ。それに」

少佐は未だにあたふたしている中尉殿に耳打ちをする。

「……………折角つかんだチャンスだ、これを機に篠ノ之の気を引くべきだと俺は思うが」

瞬間、中尉殿は電流に打たれた様に硬直する。どうやら自身がとてつもなく有利な状況下にいる事に気がついた様だ。

「それと篠ノ之」

次に少佐殿は篠ノ之さんに耳打ちする。

「………… お前の言い分もわかるが、そんな調子では筋金入りの鈍感体質であるあいつは落とせない。これを機に一気に攻める。そうすればあいつだって落ちるさ」

瞬間、篠ノ之さんも中尉と同じ反応を見せた。

「そ、そうか、そうだな。この機にあいつを落とせばいいんだな。うん」

「ああ、その通りだ」

「ありがとう。確か真柴とかいったな」

「ああ、真柴司朗だ。織斑一夏とは中学からの親友だね。彼について知りたい事があつたら聞いてくれ」

「ああ分った。私は篠ノ之箒。一夏の幼馴染だ。よろしく」

「こちらこそ」

自己紹介を終えてお互いに握手をする二人。後ろの方で中尉殿が少しムッ、としているのは嫉妬だろうか。さて、俺も自己紹介をせねば

「俺は野口孝吉、同じく織斑一夏とは親友だ。よろしく」

「ああ、よろしく」

俺が自己紹介をすると、後の面々も続いて自己紹介を始める。

「同じく、金原庄造だ」

「同じく金原久枝。庄造さんとは親戚関係です。よろしく願います」

「鈴木敬子です。よろしく篠ノ之さん」

「ありがとう。皆よろしく、私の事は筈で結構だ」

すっかり気を良くしたのか、いい笑顔で皆と打ち解けていく篠ノ之さん。こうしているとなんだか、女学校で教鞭をとっていた時を思い出す。

「じゃあ、寮に行きますか」

「そうですね」

俺の提案を笑顔で受け入れる少佐殿。日が傾き、観客達がひき始めちようどいい頃合いだろう。

「行きますか」

「ああ」「ええ」「うむ」「はい」「はっ」「はい」

少佐殿を前に、俺たちは寮に向かって歩き出した。もうすぐ日が、地平線に沈もうとしているころだった。

第七話（後書き）

どうでしたか、今回はいろいろと無理があると思っていましたけど。台詞作りとかキャラの扱いとか。

今回は曹長さんと級長の初登場編でもあったのですが、やっぱりこういうのってキャラの扱いが難しいですね。

今後の更新も遅くなるとは思いますが、ゆったり気ままに待っていてもらえると思います。

意見・感想等お待ちしています。

では！

第八話（前書き）

今回はちょっと短めですが、どうぞお楽しみください！

第八話

金原 Side

『曹長、野口先生と共にすぐに俺の部屋に來い』

放課後の試合が終わり、野口先生と共に自室に行き荷ほどきをしていたところ、少佐殿に携帯で呼び出され1024号室に向かった。軍隊時代に何度も訊いた命令調での一方的な会話だったから、その内容は大方察することができる。

荷物の中からいくつかの文庫を取り出して机の上に並べていた野口先生に電話の事を話し少佐殿の部屋に行くと、少佐殿は部屋の中に俺達を招き入れ、自分の荷物が入った鞆の中から、嚴重に封が閉じられた便箋用の茶封筒を取り出した。

「命令書でありますか」

「……………そのようだな」

封を破り、中から綺麗に折りたたまれた紙の命令書を取り出した少佐殿は静かに頷く。

「電子メールのやり取りが当たり前な今時、極秘命令を紙で送りつけてくるとわな」

紙を開きながら少佐殿はかすかな笑みをこぼす。確かに、職務上の指示等が電子メールでのやり取りが多くなった今日で、紙による命令書は非常に効率が悪い。だが、

「ハッキングなどをされるのを恐れているでしょう。紙ならその場で燃やしてしまえば痕跡は残りません」

野口先生の言うとおり、例え削除してもデータがパソコンの中に残ってしまう電子メールとは違い、紙ならば、読んだ直後に燃やしてしまえば一切の証拠は残らない。

紙を開き、命令書の内容に目を通す少佐殿。その立ち振る舞いは正しく現役参謀将校のソレであった。やがて、内容に目を通し終わったのか少佐殿は命令書を無言で俺に渡してくる。

読め、という事なのだろうか、俺は少佐殿の手から命令書を取り目を通す。

『PT発 第***号命令』

命令書の頭にはいつも通り、命令の発令元と命令番号がタイプされている。

『PT』——それは命令を発令した組織の名前を略したもので、俺達の間では暗号として使っている。

『PT』——Phantom Task 『亡国機業』の名を持つ組織

それこそが、俺達が属する『軍』としている組織だ。

真柴 Side

亡国機業

この世界の『裏』に存在し、第二次世界大戦のさなかに現れ、60年以上もの間その存在理由と行動目的が明らかとなっていない。まさに『亡霊』の様な組織である。

表向きはだが、

亡国機業。その前身は我が帝國陸軍の特務機関であり、戦争の終結後、日本をはじめとする敗戦国軍の残党や、中国軍やソ連軍などの戦勝国軍からの脱走兵などが集まり、今の形となった。

その主な目的は、戦争や紛争等の根絶、また、『世界に悪影響をもたらす兵器や技術』等の破壊、もしくは奪取。それこそがこの組織の行動目的であり、存在理由でもある。

俺達がこの組織の存在や行動目的を知った時、俺達は迷うことなく組織へ帰属した。

元帝國陸軍軍人である俺と曹長はいざ知らず。帝國陸軍の、『大日本帝国』の組織である亡国機業に帰属することに、なんら躊躇いなどなかった。しかし、

(まさか、野口先生達までくるとはな)

チラツと、曹長の手から命令書を受け取り読む野口先生に目を向ける。

俺達が組織への帰属を決めた時、なぜか軍の関係者でもない野口先生達までもが組織に帰属することを強く望んだのだ。

俺と曹長はその時、はつきりと、背筋が凍りつくような『恐怖』を感じた。

あの時の様に野口先生達を死なせてしまうのではないか。そんな事を考えてしまったのだ。

俺と曹長は必死になって野口先生達を抑えようとした。最悪、脅しという手段にでることさえ考えた程だった。しかし野口先生は、

必死になつて説得の弁を吐きだす俺達に向かつてただ、人を安心させるような笑みを浮かべ、しかし力強い言葉で言つた。

『もし私達に、転生という本来ではありえないような事が起きた事に理由があるのだとすれば、私たちは喜んでそれに従います。おそらく、少佐殿達と共に戦う事こそがソレでしょう。ならば私達は、それから逃げることなく戦いましょう。それが定めと言つのであれば』

結果、俺達二人は折れた。

彼の説得に反論の術をなくしたというのもあるが、『以前』、皆を死なせてしまった引け目を感じてもいたからだ。

「『引続き現状ヲ維持セヨ』、ですか」

命令書と呼んだ野口先生はそうボヤク。命令書には、俺達が学園に来る以前に受けたものと同じものが記されていた。

「なんとかして、織斑中尉殿に『記憶』を思い出させることは出来るのでしょうか？」

思案顔で呟く曹長。確かに、中尉に『記憶』を思い出させた上でこちら側に引き込むのは早い方がいいと俺も思う。だが、

「確かにその方がいいと俺も思うが、上からの命令がある以上、それに従うほかないだろう。それに、」

野口先生達はともかくとして、俺達は軍人だ。命令が出ている以上は命令に反する行為をすることは絶対にできない。それに、

「……………中尉が、自分のしてしまった事が何なのか思い出したらどうなるか。俺達には全くわからない」

中尉が、自分の『記憶』を思い出した時、果たして彼はその『記憶』の重みに耐えきることが出来るのだろうか？ 最悪、心を壊してしまっても不思議ではない。自分が今まで『普通の人間』だと思っ
っている程に、だ。

「……………大丈夫ですよ」

不意に声を掛けられて顔を上げると、野口先生が命令書をこちらに差し出しながら、誠実そうな顔に精一杯の笑みを浮かべていた。

「大丈夫、何も怖がる事はありませんよ」

人の心を温かくするというのはまさにこの事と言うのか、事を重く考えるのがばからしくなってしまう様な笑みと言葉だった。曹長もそのようで、『昔』と変わらない厳つい顔に微笑みを浮かべている。もしかしたら俺もそうなっているのかもしれない。

「そうですね。事を急いても仕方がない」

俺は踏ん切りをつけるように呟いた後、受け取った命令書を灰皿代わりに用意した食器の小皿の上に置き、曹長が取り出したマッチで火を付けて燃やす。部屋の中には一瞬で燃え尽きた命令書の灰とヤニ臭い臭いが広がった。

第八話（後書き）

今回は真柴少佐達の来世での行動を明らかにしてみました。
ご意見・ご感想等お待ちしております！

それではまた！

第九話（前書き）

遅くなつてすみません！ さすがに2作品掛け持ちというのはキツイですね。

ではどうぞー！

第九話

一夏 Side

「ねえねえ見て、噂の男子達よ」

「やっぱりかつこいいな、特に織斑くんとか」

「え、やっぱり真柴くんじゃない？ あの落ち着いた大人の雰囲気とかさ。それに千冬様以上に強いみたいだし」

「私はやっぱり野口くんかな。なんか彼って優しい学校の先生って感じじゃない？」

「私からすれば金原くんかな。あの寡黙さと逞しさが何とも」

「……やはりというかなんというか。1日たつても俺達が注目的であることに変わりはないらしい。せつかくの料理の味も全くわからない。というか、明らかにギャラリーが増えてないか？」

「やはり慣れんな。こういうのは」

朝食を食べに来た生徒でこつた返す寮の食堂。その一角のテーブルで俺の左隣に座り味噌汁をすすする司朗は俺達を遠目に見ている、というか観察しているギャラリーをチラッと見て苦笑している。他の面子もこの状況に慣れないのか、疲れた表情でそれぞれ頼んだ料理を食べている。まあ、疲れているのは男子だけだけどな……

「確かに、こう四六時中見られ続けられたんじゃない」

まるでウーパールーパーになったような気分だ。このままじゃいに穴が開くぞ。ストレスで。

ちなみにウーパールーパーというのは少し前に流行った動物の事で……詳しくはネット等で検索してくれ。

「まったく。たるんでいるぞお前達」

ハハツ、俺の右隣りで焼き魚をついついているファースト幼馴染からの有難いお言葉に涙が止まらないね。まったく。

「そんなこと言わなくたっていいだろ」

「ふんっ」

どうも昨日の夜から期限が悪いな筈のやつ。なんでだ？

「自分の胸に聞いてみる！」

「無茶言っな！　　というか心読むなよ！」

「……………中尉殿、もしかして」

パンにジャムを塗っていた孝吉が、もしやと声を掛けてきた。

「昨晚、お2人の部屋に客が来ませんでしたか？」

「ん？　　まあ、来たけど」

1年生が8人、2年生が15人、3年生が21人程自己紹介にな。

「なるほど」

昨日起きた事をすべて話すと孝吉は納得して様に呟いた。というか「なるほど」ってなんだよ。分ったんなら教えてくれ。

「自分でお考えください」

んだよちくしょー！ お前ひょっとして俺のことが嫌いなのか？ 中学の時お前から借りた宿題のノートをコピーして単価100円で売った事まだ根に持ってるのか？ というか皆も、溜息ついてないで助けてよ！ なんか簿の雰囲気がどんどん悪化してんだよ！！

「……………苦労してるな、篠ノ之」

「頑張ってください」

「諦めちゃだめですよ」

「……………ありがとう」

ん？ 庄造と久枝と敬子が簿と何か話してるな。通夜みたいな雰囲気だけど何を話してるんだ？ よく聞こえないな。それになんかイラッとする。

「み、皆、此処いいかなっ？」

「へ？」

見るといつの間にか、調子ツ良くのトレーを持った女子3人がや

って来ていた。

「ああ、別にいいけど。皆もいいよな？」

「断る理由はないよ」

トーストをかじっていた司朗が快く同意してくれたことで声を掛けてきた女子は安堵の息を漏らし、後ろの二人は小さくガッツポーズをとっていた。すると、周囲から妙なざわめきが聞こえ始めた。

「ああ、私も早く声掛けておけばよかった……」

「まだ、まだ2日目。大丈夫、まだ焦る段階じゃないわ」

「昨日の内に部屋に押し掛けた子もいるって話だよ！」

「な、なんですって!？」

……まあ、気にしないでおう。

「うわ、織斑くんたちって朝すつごく食べるんだー」

「お、男の子ふだねっ」

「ま、朝はこれだけ取らないと一日キツイんだよ。てか、女子って朝それだけしか食べなくて平気なのか？」

3人は、朝食のメニューこそ違いが飲み物一杯にパン一枚、そしておかず一皿——しかも小皿——だった。

「わ、私たちは、ねえ？」

「う、うん。平気かなっ？」

「お菓子よく食べるし」

それ太らないか？

「一夏、私は先に行くぞ」

「ん？ ああ、また後でな」

食事を早く終わらせた筈はさつさと席を立て行ってしまう。ちよつと怒っていたようだけど、なんでだ？

「織斑くんって、篠ノ之さんと仲いいの？」

「お、同じ部屋だって聞いたけど」

「ああ、まあ、幼馴染だし」

「「「「え！」「」「」」」

俺としては別段意識することでもないんだが、なんでこんなにどよめくんだ？ うゝむ、十代女子というのはイマイチわからん。

「の、野口くん達は知ってたの？」

「まあね、中学の時に話を聞いたことはあるよ」

第九話（後書き）

突然ですがアンケートです。

少しネタばらしをするようですが、『転生者組』のISスーツを軍服と国民服にする予定なんです。それに合わせてというかなんというか、一夏・真柴・金原に持たせる拳銃について。金原については原作と同じくモーゼル拳銃こと『モーゼルM712シユネルフアイヤー』を持たせようと思っているんですが、残りの一夏と真柴については拳銃を決めかねているんです。それは『日輪の遺産』において原作と映画で二人が使っていた拳銃が全く違ったからです。なので今回、皆さんに2人に持たせたい拳銃は何か、アンケートを取りたいと思います。

この中から選んでください。

？ ベビー南部

？ 九四式拳銃

？ ブローニングM1910

？ ミネベア9mm拳銃

？ シグザウエルシリーズ

？ ベレッタM92F

一応六つ上げましたが、この中以外で何か似合う拳銃があるならば遠慮なく教えてください。期限は11月30日の午後0時。後書きの下にある『感想を書く』に、もしよろしかったらご意見・

感想と一緒に書いてください。
ではまた!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5157x/>

IS 日輪の乙女達

2011年11月23日17時48分発行